

歴史資料館だより

発行者 聖隷歴史資料館

〒四三三-一八五五八
浜松市三方原町三四五三
聖隷クリストファー大学二号館二階
TEL 〇五三(四三九)三四〇七
FAX 〇五三(四三九)三三四七

小羊学園特別展に寄せて

社会福祉法人小羊学園理事長 稲松 義人

小羊学園の創立者山浦俊治が天に召されて八年半になります。私たちの中には山浦は今もお確実に生きていますが、小羊学園で働いている職員の多くが山浦と直接面識がないことを知るとき愕然とします。最期を聖隷ホスピスで過ごした山浦は、「キリスト者として教会で質素な葬儀をしてほしい。その後は、記念会をすとか、記念誌をつくるとかはしないで欲しい。あとのことは施設長たちと相談してやってください。私のことは忘れてしまってもいい。」

当時法人本部におり山浦の一番近くで仕事をしていた私に、こんなことをおっしゃいました。この言葉を私と一緒に聞きになった明子夫人は、山浦の遺志を忠実に守り、記念誌の編集も記念会もなさいませんでした。周囲の人たちからは「山浦さんの業

績をまとめておかなければいけない。」とご忠告いただきましたが、私も今までそのことにはほとんど手をつけずに過ごしました。

山浦は民間社会事業の多くが世襲の形で引き継がれていることを好ましく思っています。山浦の思いの中では、小羊学園は山浦個人の業績ではないという信念がありました。私も同じキリスト者としてよく理解できます。「これは神様の仕事なのだ。私はそれに仕える僕（しもべ）なのだ。」その思いを出発点にするとき、小羊学園も「聖隷」と同じ基盤に立っていると考えるのです。聖隷の長谷川保さんも、十字の園のハニ・ウォルフさんや鈴木生二さんもこのことにおいて、山浦と同じだったと思うのです。私は、明子夫人にこう申し上げま

した。「今回の特別展は、聖書の伝える神様の救いの歴史と同じです。神様が小羊学園の歩みをとおして、山浦俊治という人物を用いて、どのように働いてくださったのか、私たちに臨んでくださったのか。それをこれからの人たちに伝えるための一つの機会です。」

聖隷歴史資料館そのものが伝えようとするものと同じであろうと思います。昔は大変だったなあ。〇〇の業績は立派だなあという感想しかもてなかったとしたら、それは正しい理解ではないと思うのです。困難に直面したとき、新たな課題を負ったとき、そこにいた働き人たちに、あるいはその場に生きていた人たちに、神様がどのように臨んでくださり、それを支え、導いてくださったのか。それを伝えるためのものであります。だからこそ、ここに伝える歴史は、過去のことでありませぬ。今の時代、新たな課題に直面し、それに立ち向かうために苦悩の中にいる私たちに、希望を伝えてくれるものなのだと思います。

◆聖隷歴史資料館のご案内◆

開館時間は一〇時～一七時です。展示をごゆっくりご覧いただけるよう一六時三〇分までにご入館ください。

休館日は、土・日、祝祭日及び聖隷学園の休業期間とさせていただきます。聖隷集団の各法人・施設の職員、入居者の皆さんは、時間外や休館日であっても入館できます。

時間外や休館日に入館を希望される方は、予めお問い合わせください。

聖隷歴史資料館では、現在、「小羊学園」特別展を開催しております。小羊学園で引き継がれている理念、創業から今日までの歩み、知的障害児者、重症心身障害児者とともに働いた若い職員、そしてその働きを周りで応援して下さった心優しい方々の胸を打つエピソードを中心に展示が行われています。「小羊学園」特別展は一〇月末まで開催の予定です。この機会に、是非一度、ご来館ください。お待ちしております。

尚、一月からは「牧の原やまばと学園」特別展を開催する計画で、現在準備が進んでいます。

このひとつを積み重ねて

遠州栄光教会 牧師 森田恭一郎

小羊学園は、その創立以来、唯一
一点目指してきたことがあります。

本日ここにも小羊学園の理念として掲げられているマタイ福音書一八章にある通り、それは「九十九匹を山に残しておいて、迷い出た一匹を捜しに行く」こと、一匹を大切にすることです。これを創立以来三十七年間目指し、当初は十字の園にも支えられながら、その営みを積み重ねてきました。

今、讚美歌二〇〇番を歌いました。

その羊飼いは「遠くの方々、谷底まで」迷子の羊を捜します。そして見つめる。見つかったその羊は「喜びしさにおどりました」。けれども、この讚美歌はもう一節続けると良いと思います。喜ぶお方がもう一人。「もし、見ついたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう」という羊飼いの喜び、キリストの喜びを歌うべきです。小羊学園は、その一人が見つけ出された時の本人の喜びと、それをお喜びになるキリストの喜びにサンドウィッチのように挟まれ、囲まれ、本人とキリストの喜びを、小羊学園自らの喜びとしてきました。

イスラエルの最古のものと云われる信仰告白、「私の先祖は、滅び行く一アラム人であり、わずかな人を伴ってエジプトに下り、そこに寄留しました。……エジプト人はこの

わたしたちを虐げ、苦しめ、重労働を課しました。わたしたちが先祖の神、主に助けを求めると、主はわたしたちの声を聞き、わたしたちの受けた苦しみと労苦と虐げをご覧になり、力ある御手と御腕を伸ばし、大いなる恐るべきこととするしと奇跡をもってわたしたちをエジプトから導き出し、……この土地を与えられました。……(以下略記)」「(申命記第二十六章五—一〇節)は、ただ「神を信じます」と神を告白するだけではなく、その信仰告白の中に自らの歴史を含んで告白しています。

今日は歴史資料館での特別展です。

それは歴史を振り返る作業です。創立以来三十七年を経て、創立の理念をこの百匹の羊の譬えの中にあらためて見出します。この聖句が創立記念日の度に、理事会の度に、折に触れて読まれてきました。けれども、信仰告白の中に歴史を含むということは、この理念が開始時の「創立」

の理念ではなく、創立以来続けられてきた「営み」の理念であるということ。そうではないと、例えば今年就職された新しい職員にとって、小羊学園の理念は、単なる創立時の理念になり、何か古い遺物のようなものになりかねません。でも、もちろんそうではない。敷地内であれ敷地外であれ「あ、〇〇君がいない」と気付いて、その一人のことを心配してみんなで捜しに行く。その営みは小羊学園の理念の聖句そのままです。小羊学園の創立の心は、その後

の今日に至る日々の営みの心です。九十九匹に消されることのない一匹、迷い出た「一匹」を捜しに行く、そして目の前にいる「その一人」を大切に。唯一一点、このことを目指す毎日の営みが、三十七年間の歴史となり、この歴史が小羊学園の歴史を含んだいわば信仰告白、日々の営みを含んだ理念になっているわけです。

山浦俊治さんをはじめとする、このひとつを積み重ねてこられた小羊学園の皆さんの営みが、これからも日々の営みとなりましますように。日々の営みが、この聖書の言葉に励まされて、これからの創立以来の理念を営みの理念としていきますように。キリストの喜びの祝福の中にあり続けますように祈ります。

(小羊学園特別展開催礼拝にて)

歴史資料館の四つの聖句(その四)

マルコによる福音書第二二章一八〜三二節
：第一の掟はこれである。『…心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。』

出エジプト記によれば、神の掟は二枚の板に書かれた。モーセが受けた掟は「十の戒めからなる契約の言葉」以外にもある。しかし二枚の板に書き記されたのは十戒であった。十戒は諸々の掟を要約する。

それぞれの板にどの掟が書かれていたのか、出エジプト記は伝えない。しかし、第一の板には神と人間との関係を定めた掟が書かれ、第二の板には人間と人間との関係を定めた掟が書かれていたと考えてよい。

六一〜三カ条あるユダヤ教の掟の中には、例えば衣服や食物に関する掟のように、あるいは髪を剃ることを禁じる掟のように、神との関係にも、隣人との関係にも関りのないような掟もある。役獣や土地の利用に関する掟もある。しかし、その中でとくに重要な部分は神と人間との関係および人間と人間との関係に関する掟であると聖書は断定する。

イエス様が「あらゆる掟の中で、どれが第一でしょうか」との問いに答えて選び出された二つの掟は十戒の中に

小羊学園特別展の展示品紹介

小羊学園特別展は、前二回の特別展の展示の内容と少し趣が異なります。創立者の山浦俊治さんは生前、「亡くなった後は記念会をしない。記念誌も発行しない。私のことは忘れてしまっていていい。」と言が残したとお聞きします。明子夫人も「今回の特別展に当たっては山浦個人やその功績を紹介するようなことは一切不要。」とのことでした。そのようなことから創立者に焦点が当たりすぎることを極力避けて、小羊学園の子供たちを中心にしてともに働いた職員と周りで応援してくれた方々のエピソードを中心としたものになり

ました。そのエピソードは山浦俊治さんが書き残されたテレフォンメッセージの自筆原稿や機関紙「つづえ」によるところが大きく、特に一回の録音で四百字詰め原稿用紙が三枚、一年間約一五〇枚、一〇年に及んだテレフォンメッセージですから実に一五〇〇枚以上の原稿用紙が残されており、その一部を展示しています。テレフォンメッセージに関するものとしては、現存する録音テープ六巻と今ではもう生産打ち切りとなった再生機を展示してあるほか、メッセージの始めと終わりに流れていたオルゴールをじかに触れることが

できます。展示パネルは大小あわせて一七枚。「小羊学園の理念」を示したパネルを始めとして、小羊学園の歴史を通して今もなお記憶されている胸を打つエピソードをちと共に働いた



創立時を支えた方々のパネル

ができません。展示パネルは大小あわせて一七枚。「小羊学園の理念」を示したパネルを始めとして、小羊学園の歴史を通して今もなお記憶されている胸を打つエピソードをちと共に働いた



テレフォンメッセージ「心のともしび」の自筆原稿

若い人たち」と「心やさしき隣人たち」の二枚のパネルにまとめて紹介しています。

このほか、小羊学園の歩みを二枚の年表や創立時を支えた仲間たちを紹介したパネル、小羊学園創立の時期から現在に至る事業展開をまとめた二枚のパネル、そして創立者山浦俊治さんが小羊学園の働きをはじめめるに至った経過と、その働きを通して目指してきたこと、願ってきたことなどをまとめた一枚のパネルなどがあり、館内併設の会議室壁面に展示されています。また「小さいもののひとりのために」と題した約一分の映像資料と現存するテレフォンメッセージをDVDに収録しており、懐かしいあの声がもう一度、何度でも聞くことができます。ぜひご覧ください。

はない。イエス様が「第一の掟」とされるのは申命記六章五節の掟である。これは十戒の一つ四を要約している。「第一の掟」はレビ記十九章十八節からとられた。イエス様はこの掟が十戒の五と十を要約するものと考えられた。パウロも『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな』、そのほかどんな掟があっても、『隣人を自分のように愛しなさい』という言葉に要約（ローマ十三章九節）されると言っている。

福音書に「金持ちの青年」の逸話がある。青年は「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、父母を敬え」などの掟をすべて「子供の時から守ってきた」と言う。隣人を自分のように愛することについて落ち度はないと言うのである。それに対してイエス様は「あなたに欠けているものが一つある」と言われた。イエス様がこの青年に欠けているものは第一の板に書かれていた掟を守ること、つまり「神への愛」であると考えておられるのは明らかである（マルコ十章十七節以下）。経済的に豊かで、隣人愛に富んでいても、この青年の心は満たされていなかった。彼の隣人愛も聖書が教える隣人愛になっ

ていかなかったに違いない。聖隷がイエス様に忠実であるために「神への愛」と「隣人への愛」とのどちらを欠いてもならない。どちらか一方でも欠くときに、聖隷創設時の精神は消えてしまう。それは聖隷が聖隷ではなくなることである。長谷川保生誕百年の年に、確実に伝統を継承することが求められる。

（聖隷学園宗教研主任 佐柳文男）

◆聖隷歴史散歩

歴史資料館に展示されている黎明期のパネルに「聖隷社」創業の頃の「聖隷社クリーニング店」、「聖隷社農場」、「消費組合浜松同胞社」やその後の「ベテルホーム」の位置関係を示した略図が記されています。聖隷社創業の頃のこれらの事業の場所とこれに関わった人物の居住分布を見てみると、現在の高町の交差点から半径五〇〇m圏内に住んでいたことがわかっていきます。

聖隷学園キリスト教センターでは数年前から聖隷ゆかりのこれらの跡地を実際にたどってみる「聖隷歴史散歩」を年二回行っています。今回も聖隷社クリーニング店の頃から聖隷で長く働かれ、今なおお元気でいらっしゃる鈴木唯男さんと佐柳文男キリスト教センター長のご案内で四月二六日に行われました。

聖隷社クリーニング店のあった場所は、高町の交差点から南に入った現在の遠藤医院のあたり、消費組合は現在の高町薬局のところ、そして消費組合の初代理事長雨宮猪藤の雨宮パン屋は現在の高町バス停近くの山二不動産のあたり、陶器店を営んでいた長谷川保の生家は現在の出雲殿と須山ふとん店に挟まれたあたりにありました。一九三〇年、結核を患った桑原青年を受け入れた愛耕園は今では閑静な住宅街に変わり、そ



ベテルホームのあった蛭塚1丁目付近を訪ねて

の後移転を余儀なくされた宗源院や入野村大鱈（現在の蛭塚一丁目あたり）のベテルホーム跡を訪ねると、当時を偲ばせるたたずまいが残っています。ベテルホーム跡には「聖隷病院発祥の地―ベテルホーム跡―」と記された碑がありますが、近々この土地も浜松市が売りに出す予定だそう、この付近の風景も一変してしまうことと思われます。浜松市の図書館に出かけると昭和九年発行の市内の地図や当時の住宅地図なども保存されており、これらを手がかりに歩いてみるとよりいっそう聖隷の歴史が身近なものに感じられることでしょう。今年度、歴史資料館では長谷川保著の「夜もひるのように輝く」をもとにした映画版の作成を進めています。「聖隷の姿」など聖隷の映像を約二十年数年にわたり撮り

続けてくださっている映画監督の熊崎嘉男氏の手でこれら聖隷ゆかりの地の現地ロケも少しずつ進んでいきます。ご期待ください。

◆刊行物のご案内

長谷川保著

『老いと死をみとる』

聖隷ホスピスのあゆみ

『老いと死をみとる』は一九八二年一二月に柏樹社から刊行されました。翌年三月、長谷川保はテレビ埼玉の「死にゆく人々へのケア」に出演し、ホスピスについて次のように語っています。「……たくさんの方々がヨーロッパからエルサレムその他聖人の遺跡に巡礼に行った。昔のことです。それから途中で病気をしたり、くたびれてしまったり倒れてしまったり、それを中世の修道院でホスピスというものを作って、温かいベッドや温かい食料を提供し、看護をして、元気を付けさせて、そして再び巡礼の旅にでかける。つまり『通過していく』ということ。……今から六〇年ほど前にアイルランドにエイケンフッドという尼僧さんがおられて、そこで当時誰も顧みない肺結核患者を収容しました。バタバタとみんな死んでいってしまうわけですから、死は人生の最後、終わりではない。それは天に行く門である。つまり中世の人が通過をして、巡礼して

いったのと同じことだということで、エイケンフッドがその結核患者の収容所に『ホスピス』という名前をつけ、それをまた一六年前にロンドンのシセリー・サンダースが癌の患者を看っていくのに、『死は天への門である』という考え方からこれにホスピスという名前をつけたのです。それを今度は日本に持ってきたわけですが、（ホスピスでは）『死の受容』と『痛みをとる』ことをしているのですが、これは今から一六年前にセントクリストファーズホスピスができて、九年前にアメリカにコネチカットホスピスができた、つまり癌が不治であるというときのやり方なんです。ところが今日ではアメリカでもイギリスでも日本でも癌は五〇%以上治ります。医学が非常に進歩した今日、その治療医学を受け入れないということはない。私もはそれにプラスして最新の治療をしていく。そうすると、この中から治っていく人が一三%ぐらい出てくる。ですからあくまで私どもは最後まで治療をやめない、同時に痛みをとる、あらゆる援助をして、経済的にも心理的にもあらゆるところから彼らを助けていく、これがホスピスという考え方です。」と述べておられます。

聖隷のはじめ、ベテルホームの時代にすでにホスピスの原型があったことを知らされると同時に命の質を考えさせられます。